

「お笑い江戸名所」展 歌川広景の全貌

太田記念美術館（東京・原宿）

2017. 01. 05～29



「歌川広景」（生没年不詳）は、「歌川広重」の弟子として江戸時代後期に活躍した浮世絵師で、大判錦絵《江戸名所道戯尽 31 枚揃》などの作がある。

彼の名前はほとんど知られていない謎の絵師であるが、“ユーモアある作品は極めて個性的”で、本展は代表作を揃えた初の本格的な催事である。

これらの「歌川広景」の作品は、江戸時代、実際の生活に俗っぽい部分が豊富で、おらかな江戸の生活に入り込むような楽しさがあり、当時の人たちが浮世絵を楽しんでいた実情を揃物として「版画」にまとめあげている。



「湯島天神の台」は、上記代表作シリーズのひとつで、1859 年～61 年にかけて制作された 50 点からなる作品で、舞台は江戸・湯島天神の境内である。

不忍の池が見える高台の風景明媚な地で、そばの出前をしている男が犬にかまれ、侍の頭にそばをぶちまけてしまう。ズッコケてしまった侍をお供の者が見て大笑いする様は、背景の風景がきれいなだけに “ちゃめっ気” のある作品である。



「本郷御守殿前」は、突然の夕立に 3 人の男が肩車をして 1 本の傘に入ろうとする場面を描写した作品で、傘の随所が破れて、下で支える男の不満そうな表情がおかしくて、あきれるほど馬鹿馬鹿しい。

他にもフンドシ姿の男が橋から川に飛び込み、小舟に激突してひっくり返っていたり、急勾配の太鼓橋で滑ったりとドタバタぶりが笑いを誘う作品などが見どころである。